

## 2026 年度 年次報告会 資料

2026 年 6 月 14 日（日）11 時より ヨセフホールにて

### 内容

1. 主任司祭 高祖敏明 神父のお話
2. 助任司祭のお話
  - ・サトルニノ・オチョア 神父のお話
  - ・柴田 潔 神父のお話
  - ・ボニー・ジェームス 神父のお話
3. 活動報告（2025 年度信徒代表 鈴木靖規）
4. 活動計画（2026 年度信徒代表 鹿毛ゆかり）
5. 質疑応答
6. 財務報告（財務委員長 谷口央樹）
7. 財務に関する質疑応答

※ 配信は 5.まで実施。

2026 年度年次報告会における挨拶（6 月 14 日：10 時のミサ後）

主任司祭 高祖敏明

皆さま、2026 年度年次報告会にお集まりいただき、ありがとうございます。また you-tube でご参加の皆さまにもご挨拶申し上げます。皆さまが日頃から私たちの教会とともに歩み、私たちの共同体を物心両面で支えてくださっていることに、まずは御礼申し上げます。

2025 年の聖年は過ぎ去りましたが、希望の巡礼者の旅は続きます。私たちの聖イグナチオ教会も、この 1 年の間に 420 名もの受洗者を迎え入れた一方、120 名の方が天に召されました。その中には、かつての主任司祭池尻廣幸神父様とトメニコ・ヴィタリ神父様、また、信仰入門講座や結婚講座で活躍された粟本昭夫神父様、セントロ・ロヨラでご尽力くださったシスター・マルセラ・ロサス・モラーレスもおられます。この 5 月に続いた不祥事に対しては、防犯体制の強化を図ってまいります。皆さまのお心遣いとお祈りに感謝申し上げます。

またこの 1 年は、シノドス（世界代表司教会議第 16 回通常総会。テーマは「ともに歩む教会のため—交わり、参加、そして宣教」）の呼び掛けに応じて、私たちの教会の 10 年後を展望したビジョンとパストラル・プラン（司牧計画）づくりに着手しました。

10 年後の 2036 年は、1936 年 3 月 22 日に聖イグナチオ教会の前身、麴町・幼きイエスのテレジア教会（1945 年 5 月の空襲で全焼）が献堂式を祝ってから 100 周年となります。この誕生 100 周年を迎えるとき、私たちの教会はどのような姿であってほしいか。その青写真をつくるため、昨春、麴町教会 100 周年計画策定準備委員会が設置され、私たちの教会は「どこから来たのか」「どこにいるのか」「聖霊はどこに導こうとしているのか」についてともに祈り、霊的会話を交わして来ました。

シノドス最終文書は、聖霊のうちに生きておられる主イエス・キリストの導きを、教会共同体が協力し合って識別し、「すべての人とともに歩み、キリストの光を輝かせることのできる教会にするための、霊的刷新と構造改革の道」（28 項）を歩むよう促しています。

準備委員会は『報告書』をまとめ、今年 4 月に設置された 100 周年プラン策定委員会へとバトンを繋ぎました。委員会の理念は、今年の教会テーマと同じで、「ひとつになろう キリストのうちに ～ともに歩む教会へ～」です。

AI の導入などによる時代と環境の変化も加味し、当教会の国際的な特徴をよりよく活かすために言葉と国籍の違いを越えて教会構成員がイエスにつながり、心をつなぐこと、そして、聖イグナチオ教会内にとどまらず、国内外のすべての人と「ともに歩む」教会をめざして聖霊の導く未来を識別すること、そのために希望をもって巡礼の旅を続けましょう。

皆さま、ご一緒に 10 年後を展望しながら「聖霊が主役」の司牧計画づくりに努めてまいりましょう。ご提案やご協力による「同行」をよろしく願いいたします。



2026 年度年次報告会における挨拶（6 月 14 日：10 時のミサ後）

Saturnino Ochoa, SJ

### 【あと 12 年—聖イグナチオ教会の未来を考える】

「12」という数字は、人類の文化や聖書の伝統の中で特別な意味を持っています。

1 年は 12 か月、昼夜はそれぞれ 12 時間、星座も 12、ピアノ（音楽）においても、ドから次のドまでの 1 オクターブは 12 の半音によって成り立っています。そして教会も 12 使徒の上に建てられています。聖イグナチオ教会にも 12 本の柱や 12 面のステンドグラスがあり、「12」は聖書的にも象徴的な数字です。

そのような節目となる 12 年後を見据えるとき、聖イグナチオ教会は日本だけでなく、アジアを代表するカトリックセンターになっているのではないかと思います。四ツ谷という立地は交通の便が良く、多くの人々が集まります。また、すでに多言語でミサや司牧活動が行われており、国際色豊かな共同体が形成されています。今後さらに、アジア各国からの留学生、働く人々、旅行者、観光客などが増え、教会はますます国際的になっていくでしょう。

しかし、その一方で課題もあります。異なる言語や文化を持つ人々が集まるとき、共同体の一致をどのように保つかという課題です。しかしこれは新しい問題ではありません。使徒言行録第 6 章には、すでに初代教会の時代から言語や文化の違いによる問題があったことが記されています。教会は最初から多様性の中で一致を模索してきたのです。

12 年後には司祭や修道者の数が急激に増えることは期待できません。だからこそ、信徒一人ひとりが教会の使命を担うリーダーとして育成されることが必要です。これからの 12 年は、信徒の養成と協働の体制づくりが重要な課題になるでしょう。

100 周年を迎えるとき、聖イグナチオ教会が日本とアジア、そして世界をつなぐ開かれた教会として、多様な人々が共に祈り、学び、支え合う共同体となっていることを願っています。

「あと 12 年で私も 100 歳！私は 100 周年を見ることはできないかもしれないけれど、皆さんは見るでしょう。だから今から準備する必要があります！」

## 年次報告会 日頃 取り組んでいること 助任司祭 柴田潔

### 1) 典礼をはじめ日常の教会をできるだけ円滑に回すこと。

しかし・・・5月5日（火）の朝7時ミサで工具を用いて献金箱を荒らそうとしていた。以後、できるだけ7時ミサで後部座席から全体の見守りを。

5月10日（日）10時ミサでの出来事、立ち会ってはいたが聖体拝領でのトラブルしか予測できていなかった。→防犯を含めた対策の立案。考えるほど自分ではやりきれない。生身の人間の限界。

典礼と教会学校、不測の事態まで自分には負いきれない。

「力は弱さの中でこそ十分に発揮される」（2コリ 12：9）

2000年にイエズス会員に向けた黙想会の中でのカルロ・マリア・マルティーニ枢機卿からの助言

負いきれない苦難に直面した時の実際的な3つの勧め。

第1に、自分の弱さを素直に受け入れること。

第2に、私たちの弱さを、神の力が表出する場であると認識すること。 惨めな十字架から復活の栄光が輝き出ることをイメージする。

第3に、自分の弱さや教会の弱さを自覚した上で生きていく方法を身につける。 神の前に謙虚に祈り、弱さのうちに生きていく。

### 2) 学校、修道院からの奉仕の依頼

紹介される時「イグナチオ教会から来られた柴田神父」「イエズス会の柴田神父」  
イグナチオ教会、イエズス会を信頼して、依頼されている。

期待をはずさないように、できれば期待を上回るように。

営業の世界と一緒

良い評判の積み重ね→「また教会に来たい」「（学校でまかれた種があつて）洗礼を受けたい」

イグナチオ教会は、立地、環境が恵まれている。もっと活かせるはず。そのために工夫・努力する。

聖イグナチオ教会は創立 100 周年を迎えますが、これはこれまでにいただいた数多くの恵みを振り返る機会であると同時に、希望を持って未来を見つめる時でもあります。ご存知のように、聖イグナチオ教会共同体には、多様な国や文化、言語を背景にもつ人々が集っています。その姿は、「普遍的な」「すべてを包み込む」という意味をもつ「カトリック」の精神をよく表しています。異なる背景をもちながらも、一つの信仰によって結ばれている私たちの共同体において、カトリック教会の普遍性は豊かに実現されているのです。こうした多文化・多言語の共同体を擁する当教会は、カトリック教会そのものの縮図であるともいえるでしょう。

「共に祈る」というのは素晴らしく聞こえるかもしれませんが、現実には、一つの国際的な共同体として機能させるには多大な努力が必要です。異なる文化や性格を持つ人々が集まり、一つの共同体として共に歩むことは容易ではなく、互いへの忍耐、慈愛、そして信頼が不可欠です。

様々な共同体間の絆を強める実践的な方法の一つは、教会行事を共に企画・実施することです。ご存知の通り、当教会では毎年 10 月に教会祭を開催しており、各言語共同体が企画段階から行事の実施に至るまで協力し合っています。行事の企画や実施なども大事ですが、それを超えてそこで真に得られるものは、互いの中に存在する無数の違いを超えた信頼感です。

教会祭は、大人にとって信頼関係を築く素晴らしい機会となっていますが、若者や子供たちのための親睦イベントも同様に開催されています。毎年 7 月、当教会では守護聖人である聖イグナチオ・デ・ロヨラの祝日に合わせて、「イグナチアン・ユース・デー」(IYD)を祝います。このイベントを通じて、教会の若者たちは毎年、企画から運営までを共に進める中で、交流を深め、互いを知る機会を得ています。

さらに、今年からは、様々な言語グループの日曜学校の子供たちを対象とした新しいプログラムも計画中です。このイベントの名称は「ファミリー・デー」(Family Day)で、今年は 10 月 4 日(日)に開催されます。このイベントを通じて、異なる共同体の子供たちが集い、文化や言語の壁を越えて交流を深められることを願っています。ご存知の通り、子供たちは教会共同体の未来です。このイベントが、教会の次世代がまだ若い間に、帰属意識を育む一助となることを願っています。

また、当教会では毎年 5 月と 10 月に「リビング・ロザリー」(Living Rosary)を実施しており、様々な国籍の人々が集まり、多言語でロザリオを唱えています。また、毎年恒例の教会の大掃除や馬小屋の設置など、その他の行事にも、いろいろな言語グループからの参加者が増えているのは感謝すべきことです。

これからも聖イグナチオ教会共同体が、カトリック教会の本質そのものである「普遍的」あるいは「すべてを包み込む」特性をさらに強められるよう、引き続き努力し、祈り続けましょう。

ボニー・ジェームス